

歴史認識に働きかける戦争学習

―新潟市の原子爆弾投下予定と市民強制疎開を教材として―

菅 一 典*

1 はじめに

本報告は、2006年12月に高校3年生を対象とした日本史B(4単位)の授業についての報告である⁽¹⁾。単元は、アジア・太平洋戦争にあたり、今回報告するものは敗戦直前の新潟市を舞台としている⁽²⁾。

本実践の目的は、新潟市が原爆投下の候補地となり、新潟市民に対して強制疎開が行われたという歴史的事実を通して、生徒の既存の歴史認識を触発し、当時の人々の状況を読み取らせることによって、さらなる認識の深まりと広がりを図ることにある。また、緊迫感のなかで「敗戦」を迎えることを実感させたいという思いがあった。「敗戦」までの緊迫感を共有することが、戦争について考えるうえで必要だと考えたからである。本実践では、生徒の認識を感覚で終わらせないために、授業の最後に考えをまとめる作業を行わせた。この生徒の考えを材料として、本実践を報告していきたい。

2 新潟市が原爆投下の候補地へ

本時は、最初に新潟市が広島市・長崎市とともに原爆投下候補地であったことを知っているかを生徒に問いかけることから始めた。この新潟市が原爆投下候補地である事実は、新潟市民にとっては衝撃的である⁽³⁾。したがって、授業で取り扱うにあたり、生徒が資料を実際に確認していないまでも既知のものであると予想していた。しかし、実際にはこの事実を知らない生徒も多かった。たとえ知っていても「小さい頃、新潟にも原爆がおとされそうになったと聞いて、そんなに関心がありませんでした。」という生徒もあり、この事実だけでは、生徒の認識を深めさせる状況に引き込むことができないことがわかった⁽⁴⁾。

そこで新潟市が原爆投下の候補地であった事実について生徒に資料を配付し、確認を行わせた。昭和20年7月24日付「原爆投下についての暫定委員会の決定」では、「(4)新潟(人口一五万)は、建設機器、ディーゼル・エンジン等の重要な工業都市であり、また、大陸への船舶輸送の中樞港である。」とされ、広島・長崎・小倉とともに候補地としてあげられている。そして「攻撃は正確を期するために目視爆撃が計画されており、好ましい天気を待つことになろう。四つの目標はそれぞれかなり離れているので、もし天気が予測と違う場合には、選択にまかされる確率が大いにある。」と記されている⁽⁵⁾。続く25日付「戦略空軍への原爆投下命令」には、「1945年8月3日ごろ以降、天候の許すかぎり速やかに、次の目標の一つに最初の特種爆弾を投下せよ。広島、小倉、新潟、長崎。」と具体化される⁽⁶⁾。資料を読むことを通して生徒は、新潟市が原爆投下候補地であったことを確認するとともに、資料の記述の変化から、いよいよ新潟市への原爆投下の可能性が緊迫の度を増していくことを読み取ることとなる。

3 新潟市民の強制疎開

新潟市に原爆が投下される可能性が高まるなかで、新潟市民がどのような様子であったのか、生徒へ問いかけながら、その当時の様子を考察するきっかけとなる資料として8月10日付「新潟市民に緊急疎開命令を命ずる県知事布告」を配布した⁽⁷⁾。

この知事布告は、8月6日・9日の広島・長崎への原爆投下、そして、8月10日の艦載機による石油工場や船舶への爆撃など新潟市街への本格的な攻撃が行われるなか、新潟県が緊急の会議を経て布告したものである。それは、これまで大

*新潟県立両津高等学校

規模な空襲を受けていない新潟市に「新型爆弾」が「近く使用せられる公算極めて大きいのである」とし、「一、一般市民の急速なる徹底的人員疎開」などを指示したものである⁽⁸⁾。この布告を受けた市民の様子をさらに具体的にするために、『新潟県史』通史編8の該当箇所とその様子について述べる『新潟日報』の記事を提示した⁽⁹⁾。これらの資料によれば、布告は8月11日であったが、前日の10日の夜にはうわさが広がり、すぐに疎開を開始した市民もいたようである。さらに、山下隆吉編「新潟空襲と新潟市強制疎開の記録」から、「知事の緊急疎開令に従って新潟市民は夕刻より一斉に疎開を開始し、翌朝までに全市の疎開を大略終り人口は十分の一に激減し、十三、十四日頃には街頭上には人影は見られ」ない状況であったことを生徒に示した⁽¹⁰⁾。

このことは、生徒にとっても驚きの事実であった。現在と規模の違いはあるが新潟市から市民が疎開しほとんど姿を消していたのである。この驚きは、原爆が落とされるかも知れないという恐怖と不安に駆られる当時の人々の思いを汲み取り、また、自分だったらという思いへ生徒を導いたようである。

投下候補地であったことを知っていた生徒は、「勉強する前から聞いてはいたけれど、実際詳しく勉強してみるとその時の新潟市の様子がよくわかった。原爆が落とされると聞いて、市中が大混乱したと書いてあるけれど、もし自分がその時代に生きていて、同じように原爆が落とされることを知ったら、混乱の前に恐怖がくると思う。」と述べる。投下候補地であったという知識が、この知事布告の提示とそれに対する市民の対応の提示によって具体化され、生徒の心に改めて揺さぶりをかけている。前掲の「そんなに関心がありませんでした。」と述べた生徒も、「しかし、新潟市へ原爆が落とされる予定であったことを学んで、自分がその時代のその場所にいたことを考えると背筋が凍りそうになります。私は経験してなくてこんなに恐れているのに、その時代、

その場にいた人の気持ちを考えると悲しくなります。」と当時の緊迫した様子を知ることによって、原爆が落とされるかも知れないという当時の様子を読み取るとともに、「私」との関わりで考えようとする姿勢への変化が見られた。

投下候補地であった事実をはじめて学んだ生徒は、「新潟市に原爆が落とされることを学んで、本当に落とされなかったことが奇跡だと思った。」と驚くとともに「新潟市の人々も疎開のために家などを失ったり、恐怖におびえながらの生活は、かなり苦しいし、いつ家を失ってもおかしくない状態だったので悲しいものを感じる。たぶん恐怖のあまり食事もうるにできない人達も多かったと思うし、なんといっても外に出ることが一番恐かったと思う。」と事実を認識するとともに、恐怖におびえていたであろう当時の人たちの様子を既習の内容をふまえて、具体的にとらえようとした痕跡がうかがえた。また、「もし、自分がこの時代に生きていたとしたら、やっぱり死にたくないし、原爆が落ちてこないように必死で祈っていたと思います。」あるいは、「私もこの当時の人だったら疎開命令と同時に、生きる為に必死で逃げたと思う。人間誰でも死ぬのは怖いと思うし、残らなくてはいけない人達も、新潟から出られないことを不安に思っていただろうし、終戦という言葉が耳に入るまで本当に辛かったと思う。疎開できた新潟の人達も、きっと大切な人と離ればなれになってしまったり、新潟を離れることに抵抗はあったのではないかと思います。」と自分自身をその環境のなかに置くことを通して、当時の人々の心境への考察を深めてみようとした生徒たちもいる。このように生徒たちは、当時の人々の思いを推し測り、原爆投下候補地であったという事実への認識を深めている⁽¹¹⁾。

原爆投下の不安のなかで新潟市は、8月15日を迎えることとなる。前掲「新潟空襲と新潟市強制疎開の記録」によれば、15日の午前6時から30分までに「敵艦上機」による新潟来襲があったようであるが、そのまま正午を迎え、「玉音放

送」が行われることとなった。

生徒は、緊迫した状況のなかで敗戦を迎えた瞬間の人々に思いをめぐらすこととなる。「結果的に原爆は落とされなかったが、ここで苦しい思いをした人達は、未来に希望をもって生きていこうと、あらためて考えさせられたのではないか。」とある生徒は述べた。

戦争が終わったということを緊迫感のなかでとらえられたことが、このような思いに至らせたのではないだろうか。

4 おわりに ー成果と課題ー

本実践の成果は、生徒が当時の人々の様子を通して、より具体的に歴史を認識し、広げることができたことにある。私も「自分との接点」をもって触れた歴史は、生徒の認識の幅を広げる可能性を持っていることを改めて生徒から学ぶことができた⁽¹²⁾。

ある生徒は、新潟に原爆が落とされていたら、「新潟はどうなっていたんだろう。という疑問もわきました。そして、私でさえ原爆が落ちてきたらどうしよう、という恐怖があるのに、その時代に生きていた人は、どんな気持ちだったんだろうか?」と考えた上で、「広島や長崎にいた人は、どんな気持ちで逃げたのか? 生きのこった人が感じたことは? など、たくさん疑問がわきました。」と述べた。この生徒は、授業を通して、広島・長崎の原爆投下について、その事実だけではなく、新たにそこで生活していた人々へ目を向けようと試みた。認識に働きかけるひとつのきっかけが、既習の歴史的事実に対しても、さらなる広がりをもたせることとなった。別の生徒は、「新潟市へ原爆が落とされる予定だったという事を私は日本史を勉強してはじめて知りました。もしも本当に落とされていたらと考えるととても怖くなります。もちろん自分の生まれるずっと前の話だし、何となく考えれば自分とは関係ないことのように思えてきます。でもよく考えれば、もし本当に新潟に原爆が落とされていたら、自分のおばあちゃんやもっと上のおばあちゃん、おじいちゃん

が被害にあっていたら今の自分はいないし、今自分が出会えた人たちもいなかったかも知れません。そう考えるとすごく身近な話で、本当に落ちなくて良かったと思います。新潟に落とされる予定だったと知って、長崎や広島のように本当に落とされてしまった県の人たちの気持ちが前よりすこし身近に考えやすくなったような気がします。」と述べ、新潟市の事例が広島・長崎への原爆投下についてより身近な問題として考えるように働きかけている。また、「もし新潟が晴れていたら新潟に落とされていたと思うと、今の自分は多分存在しないだろうし、今の自然豊かな場所にはならなかったと思う。そう思うとよかったと思ってしまいが、やっぱり素直にそう思えず、原爆が落とされた広島・長崎には、60年以上たった今でもその被害者がいて、苦しんでいるのに、運がよかったなんて素直には思えない。」と新潟市が原爆投下候補地であったという歴史を現在と関わせながら考え、広島・長崎の被爆犠牲者に対する思いを強めた生徒もいた。授業のはじめには、原爆投下に現実感がないと考えていた生徒は、「戦争の時代はすごく昔の事みたいに思っちゃうけど60年前ってことはおばあちゃんが生まれたくらいで、今の住みやすい世界は本当最近できあがったんだと思います。」と、現在を学習した過去との連続としてとらえるように変化している。

大きな課題も残されている。1つは、新潟への原爆投下が回避されたことを「運がよかった」こととして認識を留めてしまった生徒への働きかけである。このような生徒は、歴史の認識が深まっておらず、既習の内容との断絶とともに、表面的な感想で終わってしまっている。授業の内容が具体的である分、自分の考えを容易にも書けてしまうのである。

この点を補うために、意見の交換と共有を行う場面を設定し、クラス全体のなかで認識の深まりをめざすべきであった。

もう一つは、学習内容を再び日本史全体のなか

でとらえ直すことができなかったという点である。原爆投下の背景も生徒は学習しているが、新潟市に原爆が落とされるという緊迫感ほど関わりを感じられず、理解の点において本時との結びつきが弱かった⁽¹³⁾。

この授業を通じて広島・長崎への原爆投下について、そこで生活していた人々へ目が向けられた生徒がいたことから、改めて確認する場面を設定

するべきであった。

本実践を通して得られた成果と課題から、地域から具体的に描かれる戦争を、どのようにしてスムーズに教科書の「日本史」と連結させていくのか、そして、アジア・太平洋戦争全体のなかでどう位置づけていくのか、その逆も含め、今後も授業研究を進めていくこととしたい。

《註および参考文献》

- (1) 前任校の新潟県立新潟東高等学校での実践である。新潟東高校が位置する東区は、多くの工場が建ち並び、また火力発電所や石油基地もある工業地帯である。また、北海道航路や中央埠頭、漁港、新潟空港が存在し、日本海側の海・空の玄関としての側面がある。もちろん、日本海側の重要都市・工業地帯・玄関口としての役割を担っていたのは、戦時中も変わらない。このことは生徒にとって驚きだったようである。
- (2) 前時までは、アジア・太平洋戦争の年表確認を行ったうえで、次のような活動を行った。
 - (1) 新潟と日中戦争（2時間）『新潟市史』（通史編4 近代下、1997、pp323-324.）を活用し、生徒の生活圏内の一部である濁川村（現新潟市濁川）を中心とした中国への出兵者数の確認を行った。生徒が日中戦争と地域との関わりを認識する導入とした。また、出兵者の手紙から中国の戦線での様子を確認した（前掲『新潟市史』通史編4、pp324-326.）、「慰問状への戦地からの返事」（『新潟市史』資料編7、1994、pp90-91.）。
 - (2) 軍隊の様子（2時間）ここでは、資料の制約上新潟という地域や人から離れる。
一ノ瀬俊成氏の「皇軍兵士の誕生」（岩波講座アジア・太平洋戦争5『戦場の諸相』、岩波書店、2006、pp3-31.）から軍隊生活を兵士の個々の視点からより具体的

に確認する作業を行った。生徒たちには、

「二 軍隊教育の実態」「三 なぜ戦うのかー兵の世界を支える“秩序”」（前掲論文 pp10-14、pp14-18.）にみられる具体的な軍隊生活を読み取らせた。生徒たちの「戦争なんかなぜするのか」「人をなぜ殺すのか…戦争だから、殺さないで殺される」という素朴な感覚にとって、軍隊での「古兵」との関係、「刺突訓練」での兵士の心境には驚くとともに、寂然としない凝りが残ったようである。これに対して十分な時間や取り組みができなかったことも大きな反省であり、今後の課題である。

- (3) 新潟市民と戦争（4時間）再び視点は新潟に戻る。次の3つの項目から戦時中の新潟県・新潟市の様子を読み取った。①女子勤労挺身隊の様子。②戦時中の新潟市と建物の強制疎開。③新潟市と原爆《本時》。①では、特に女性に焦点をあてた。新潟県内の各地域から大阪、あるいは県内で挺身隊として働いた同世代の女性たちの様子について、『新潟県史』（通史編8 近代3、1988、pp763-766.）から読み取った。②では、重要な建築物を火災から守るためなどによって周辺の建物が破壊されていったことを学んだ。実際に生徒たちの通学途中の道路や地域も対象となっており、実際に場所を確認した生徒もいた。現在の風景のなかに当時の様子を想像しようとしたようである。

- (3) 新潟歴史双書2『戦場としての新潟』（新潟市，1998，pp127-133.）によれば，新潟市は一貫して原爆投下候補地ではなかったことがわかる。しかし，本実践では，当時の人々の緊迫感を感じさせるために，この事実の提示は行わなかった。最終的に生徒が資料から「天候のため」に原爆投下が回避されたと理解している場合が多く，この事実の確認を最終的に行う必要があった。
- (4) この生徒の発言は重要である。今野日出晴氏は，生徒にとって「自分との接点」のない「戦争の悲惨さ」や「加害のむごさ」を授業で取り上げても，「認識は蒸発し，抽象化」したものしか残らないと指摘されてきた（『戦争叙述の試み－『軍隊体験と戦場体験』から－』，羽下徳彦編『中世の社会と史料』，吉川弘文館，2005，p281.）。今回の生徒の発言から，生徒自身が生まれ育った地域，そして，歴史的に重要な場面であっても例外ではないことがわかった。また，今野氏は，授業実践の問題として「自らが体験していない過去において，果たして当事者性を回復することは可能なのか」という問題提起をされている（前掲書「戦争叙述の試み－『軍隊体験と戦場体験』から－」，p281.）。本実践は，今野氏の論文や実践から学んだところが大きい。その当時者性の回復という重要かつ大きな問題への小さな取り組みである。
- (5) 「原爆投下目標についての暫定委員会の決定」（『新潟県史』資料編16 近代4 政治編Ⅱ，新潟県，1985，pp931-932.）。
- (6) 「戦略空軍への原爆投下指令」（『新潟県史』資料編16 近代4 政治編Ⅱ，新潟県，1985，pp932-933.）。
- (7) 「新潟市民に緊急疎開命令を命ずる県知事布告」（『新潟市史』資料編7，1994，pp206-207.）。カラー図版が『新潟市史』通史編4，図12として掲載されている。
- (8) 前掲註（7）。「新潟市民に緊急疎開命令を命ずる県知事布告」。
- (9) 「新潟市民強制疎開」（『新潟県史』通史編8・1988，pp872-874.），「八月十五日」（同『新潟県史』通史編8，pp874-875.），「新潟市民の強制疎開についての新聞社説」（『新潟市史』資料編7，1994，pp207-208.）。
- (10) 山下隆吉編「新潟空襲と新潟市強制疎開の記録」（『郷土新潟』第6号，新潟郷土史研究会，1965，p51.）。『郷土新潟』第6号では，「大戦中の新潟特集」が組まれている。その巻頭言には，「従つて吾々が『大戦中の新潟』を記述する為には，個人の記録に頼ることと，今一つは，関係者を歴訪して足を以て探訪する途が残されている。」ことが述べられ，当時の実態を把握できる貴重な証言が収められている。
- (11) 大濱徹也氏は「歴史を生きる作法」のなかで，優れた歴史とは，「決してそれが過去をうまく復元したということにあるのではなくて，その時代のある思いというものを，まさに過去をかたることによって，現在によみがえらせていること」であると述べられている。また，「資料を読みなおすことは，その時代を生きた民衆の痛みだとか苦しみの体験というものを共有していくことによって，同時代人として歴史の現場に馳せ参ずるというか，馳せ動く，そういう力が問われ」としている（『日本人と戦争－歴史としての戦争体験－』「第7章 歴史を問い質す場」「三 歴史を生きる作法」，刀水書房，2002，pp.220-225.）。本実践は，大濱氏の指摘するこの2つの観点を取り入れるように試みた。授業を通して当時の人々の緊迫感を共有でき，広島・長崎の人々へも思いを馳せるに事ができた生徒もいた。その生徒の認識の変化をもっと活かせるように授業展開を工夫するべきであった。
- (12) 前掲書 今野日出晴「戦争叙述の試み－『軍隊体験と戦場体験』から－」，p281。本稿の『今

後の課題』で述べたように本実践では、表面的な認識で留まってしまった生徒もいる。

(13) 原爆投下の背景については、由井正臣氏が執

筆された部分に依るところが大きい（岩波ジュニア新書『日本の歴史』大日本帝国の時代（8）、岩波書店、2000、pp201-207.）。

中等社会科教育学会原稿《授業レポート》

【資料】指導内容（50分）

指導内容	教師の働きかけ	学習内容・予想される生徒の反応	使用資料
【導入】 新潟市が原子爆弾投下候補地であったことを資料から理解させる。	T1：「新潟市が原子爆弾の投下候補地であったことを知っていますか。」 ・資料を配付し、内容を確認させる。	S：「知っている。」；「詳しくは知らない。」；「知らなかった」 米軍の資料から新潟市が広島・長崎などの都市とともに原子爆弾の投下候補地であったこと、天候によって投下が左右されることを読み取る。	「原子爆弾投下目標についての暫定委員会の決定」「戦略空軍への原爆投下指令」
【展開】 原子爆弾投下の危機的な状況における当時の新潟市民の様子を読み取らせる。	T2「原子爆弾投下の可能性がある中で新潟市民はどのように過ごしたのだろうか」 ・「新潟県知事布告」を提示し、読み上げながら、生徒と内容を確認する。	S：「不安のなかで過ごしたのではないか」；「新潟市から疎開したのではないか」 新潟県知事の強制疎開命令によって新潟市から多くの市民が避難することとなったことを理解し、当時の市民の様子を想像することができる。	「新潟市民に緊急疎開命令を命ずる県知事布告」
	T3「強制疎開命令が出されたなか、新潟市民はどのような様子だったのだろうか」 ・新潟県史の記述と当時の新聞記事を生徒に読ませ、強制疎開時における新潟市民の様子をチェックさせ、発表させる。	S：新潟市民が混乱に陥った。S：さまざまなうわさが飛び交い混乱が生じた。S：配給も不安定になった。S：米軍の「伝單」は回収され、もっていると罰せられた。S：理髪店や食堂など生活に関わる人々は残留を求められた。 新潟市民の混乱を具体的に読み取ることができ、原子爆弾投下の恐怖に陥る新潟市の様子を理解することができる。	『新潟県史』通史編8・「新潟市民の強制疎開についての新聞社説」「新潟空襲と新潟市強制疎開の記録」
【まとめ】 授業で学習したことを、「私」（生徒自身）との関わりで理解させる。	T4「新潟市民はどのように敗戦を迎えたのだろうか。」 ・敗戦時の新潟市の様子を資料から読み取らせる。	S：「人がほとんどいない状況で新潟市は敗戦を迎えていた。」；「原子爆弾投下の恐怖のなかで新潟市民は敗戦を迎えた。」 混乱と恐怖のなかで新潟市民が敗戦を迎えたことを理解することができる。	「新潟空襲と新潟市強制疎開の記録」
	T5「新潟市が原子爆弾投下候補地であったことを学び、あなたは自身はどのようなことを考えましたか。」 ・授業で学んだことから生じた生徒の考えを整理させる。	授業で学んだことから、自分自身が考えたことを文章で整理し、まとめることができる。	

*T5の作業は、時間が足りず、この時間内で作業を最後まで終えることができなかった。したがって、後日までにまとめてくることとなった。